明海大学不動産学部

不動産の不思議

学生たちの視点と発見

第398回

ゲートウェイのデザイン

その都市らしさ、社会全体で支援を

金子 夏望
不動産学部4年

【学生の目】

福岡県太宰府市は学問の神様として知られる菅原道真をまつる天満宮で有名だ。17年度は、人口7・2万人に対して観光客数は109・3万人と、とても多い。訪日観光客が29・8％（16年度）を占めており、インバウンド観光客を意識した街づくりが課題である。

中国ほかアジアはもとより、オーストラリア、英国、フランス、スペインからの観光客も多く、日本らしさや大宰府らしさをどのように表現するかも地域活性化のポイントである。そんな中、西日本鉄道が〝沿線まちづくり〟の一環とし、〝町との共栄駅〟をテーマに太宰府駅をリニューアルした（写真）。

18年の後半に工事費約2億600万円をかけ、91年に建築された駅舎を27年ぶりに改修した。太宰府駅は大宰府線の終点で、天満宮のほか観世音寺、水城跡など、大宰府に散在する歴史的な建造物と旅行者を結ぶゲートウェイだ。

太宰府駅舎は神社建築をイメージした造りで、天満宮を連想させる外観だが、造形的に美しいとは言えない。また、飛行機やバスとの競合を抱える地方の鉄道施設として、追加投資の費用対効果も重要だ。

大宰府駅では、欄干、ベンチ、照明など小さな演出を併用し〝町との共栄駅〟を実現している。色彩には天満宮の朱色を用い、デザインのモチーフには、道真が不当な左遷で京都から大宰府に向かう際に詠んだ、梅が用いられている。

屋根を支える鉄骨を朱色に塗装してホームを回廊のように見せるなど、少額投資で地域イメージとコラボする空間をつくっている。しかし、金色のコンコースは道真のイメージとは異なり、訪日観光客を意識しすぎた印象がある。

期待を裏切らないその都市らしい空間が、来訪者の高い満足度を通じて経済効果を生む。他方、100万人以上の観光客が訪れるとしても、街のイメージづくりや観光客の満足度を上げるためには、期待を裏切らないゲートウェイにすることは大切だが、駅舎自体が収益を上げるわけでないので、資金のかけ方に工夫が必要になる。金沢駅の鼓門や長野駅の門前回廊などは、その都市の文化遺産をイメージさせるモニュメントやデザインによってこの課題の解決を図っている。

地方都市の活性化を民間企業だけに委ねることは適切ではない。その都市らしさを演出する拠点づくりを社会全体で支援することが求められる。

【教員のコメント】

結節点の役割を持つ鉄道駅はCRE戦略と親和性が高い。東京駅は空中権の売却収入で建て替えて観光名所のほか、風の通り道となって社会貢献も果たす。駅の中でも終着駅は哀愁が漂い、旅情を誘う。CRE、PRE両面で一等の戦略拠点だ。

来日観光客に意識が向きすぎな面も